

Management Club Report

Mar.2021/Vol.219

Monthly Opinion 《強い組織における組織と個人》

組織と個人の関係について考えようとするとき、かつての日本を支配していた全体主義的な考え方が未だに根深く残っているように感じることがあります。

組織目標を達成するためには個人的な欲求やわがまは押し殺して、個人は組織の発展のために働くべきであるといったような『滅私奉公』の姿勢が正しいとする考えです。昔の時代劇や戦争映画にそのような考えに基づいた行動が美化された形で映し出されたりしますし、時代劇や戦争映画に限らず現代を描いたドラマにおいても似たような感覚に支配されているものも多く、日本民族の文化としての一要素を担っているように思えます。

即ち、日本人の精神風土は、時代背景や政治体制とは無縁のもので、ある種の『自己犠牲』を通しての『全体貢献』に美しさを見出しているようです。しかも『全体貢献』に資すべき働きや行動が成果を挙げ得ず、全体の目標達成が失敗に終わったとしても、それは否定されることなく、むしろその行為の純粋さが美しさとして賞賛されることが多いように感じます。

話がいささか大きくなりますが、先の大戦において2度にわたっての原爆被災を含めた徹底的な破壊に至るまで戦争を終結させ得なかったことの要因がそこに存在しているのではないかとさえ思えます。

つまり、実現すべき組織目標の達成がなされなかったとしても、個人の自己犠牲を美しいと讃えることによって「やむを得ない」という釈然としない結果に甘んじているのが日本の組織文化なのではないでしょうか。何とも理に合わない話です。

そのような社会に生きることを宿命としながらも、強い組織を作るためには、組織と個人の関係をどのような位置づけで捉えるべきなのでしょう。今回はそのあたりを考えて参りたいと思います。

1

組織の目標と個人の目的はいかにあるべきか

組織とは何か？

「ここで言うところの組織とは何か？」この単純な質問に対する答えは何でしょうか？国語辞書を引きますと次のように解説されています。

「特定の目的を達成するために、諸個人および諸集団に専門化された役割を与え、その活動を統合・調整する仕組み。または、そうして構成された集団の全体。」（三省堂・スーパー大辞林）